
永訣の夜に

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永訣の夜に

【Nコード】

N2913E

【作者名】

いとかなし

【あらすじ】

「もう、いやだ。ここですべて、終わりにしよう——」いじめられ、生きる希望を失った少女が最期に向かった死の淵。そこで出会った“希望”とは——。夢か現実かの、不思議な世界の物語。

前編

もう、いやだ。終わりにしよう。ここですべて、終わりにしよう。
――。

* * * * *

ざあつと、木々がざわめく音が聞こえた。月明かりが眩しいほどに輝く夜、小高い丘の上にあるマンション群の団地が、不気味に浮かび上がる。その団地の非常階段をたった一人、孤独な少女が、一歩一歩、上っていく。

中学生くらいだろうか。まだあどけなさが残る少女の顔は、険しかった。だが決意に満ちた表情で、淡々と階段を上っていく。

そんな少女の脳裏で、走馬灯のように人々の声がフラッシュバックする。

「うざいんだよ」

「無視しようぜ、無視」

「いじめ？ 自意識過剰じゃないの？」

「ちゃんと、学校行きなさい」

「死ね！」

突然、少女は立ち止まり、耳を塞いだ。ドクドクと、心臓が異常なまでの音をさせる。

「……」

少女は意を決すると、また階段を上り始めた。

丘の上のマンション団地は、小さな町の象徴で、町の一番高い所

に聳えている。十三階建てのその建物は、不気味なまでに静けさを見せていた。

十三階を越えて、屋上に差ししかろうというところで、少女はハッとした。

「……！」

少年がいた。屋上へ通じる鉄格子のドアは、事故防止の為に固く閉ざされている。そのドアの前に、一人の少年が、花束を抱えて立っていた。

少女は凍りついた。先客がいるとは思わなかったのだ。少年もただ黙って、少女を見据えている。

やがて少年は、持っていた花束を解き、その場から外へと投げ落とした。白い花びらをつけた花が、地面へ向かって落ちてゆく。風に煽られ、広がり落ちる。少女はそれを、ただ黙って見ていることしか出来なかった。

「……君も死ぬ気なの？」

すると、少年がそう言った。少女は静かに頷いた。

「やめた方がいい」

少年の言葉に、少女は俯いた。静かな拒否が、少女から感じられる。

「死んだら駄目だ。君に死ぬ権利なんかない」

続けて言った少年に、少女は口を結び、静かに少年を睨んだ。

「あるわ」

少女が言った。

「ない」

少年が、きつぱりと否定する。

「あるわ！」

今度は少女が、怒鳴るように言う。

「ある！死ぬ権利はあるわよ。私の命は、私のものだもん！」

少女の叫びに似た声が、風とともに非常階段へと反響する。少年も少し睨むように少女を見つめ、少女の腕を掴んだ。

「ないよ」

少年が言った。真剣な眼差しだが、顔色は冷めている。少年は言葉が続けた。

「未成年で、ましてや義務教育が終わってない君の命は、君の保護者のものだ。君は生きなくちゃならない。生きる権利は与えられていても、死ぬ権利はない」

その言葉に、少女は少年の手を振り払った。涙が出そうだった。そのまま少女は少年を見つめる。服装からして、高校生か大学生くらいだろうか。

「なんなの？ あんた……」

少女の問いかけに、少年は苦笑するだけだ。

「あんたは、こんな場所へ何の用なのよ？」

苛立つように、少女が尋ねた。この少年さえいなければ、躊躇うことなくここから飛び降り、死ねるはずだった。それを邪魔され、少女はやり場のない怒りを少年にぶつける。

「命日なんだ。僕の……友達の」

やがて少年がそう言った。少年は少女を見つめる。

雲の多い静かな月明かりが、少年を逆光に照らし出す。少女から見える少年の顔は真っ黒になり、その姿の輪郭だけが浮き彫りになった。少女はこの状況が、少し怖くなった。

「ここで人が死んだ。ちょうど三年前に、この場所から……」

少女はゾクツとした。まるで少年は、生きている人間とは思えなかった。薄暗さに血の気は見えず、静かで穏やかな口調は、吹き抜ける風とともに冷たく響く。

「……僕は、その子の幼馴染みだった」

少年が、静かにそう言った。

「ずっと一緒だった。喧嘩しても何しても、双子同然にずっと一緒だった。それなのに……」

そう言くと、少年は階段から外へと身を乗り出した。遙か離れた地面は真っ暗だ。誰もいない中庭のコンクリートの歩道が、微かに

月明かりに照らされている。

少女も地面を見つめた。随分高い。ここから飛び降りれば、間違
いなく死ねるだろう。明かりもない中庭には、人の気配もない。

そしてそのまま、少女も外へと身を乗り出した。強い風が吹き抜
ける。その風に煽られて落ちるのも良い気がした。

「私はずっといじめられてた……勉強もスポーツも人並み程度で、
動きもトロくて、うざいって……」

やがて少女はそう言つと、空を見上げた。雲が多いが、月明かり
だけは相変わらず、恐ろしいほどに光っている。

何も言わない少年に、少女は言葉を続けた。

「友達がいなわけじゃなかった。身近な人には軽く相談してみた。
だけど本当は、家族と本音を話し合える関係もない。先生も上辺だ
けで、結局何もしてくれなかった……」

「……だから、死ぬ気でここに來たの？」

少年の問いかけに、少女は頷いた。

「死ねば楽になれるとも思ってるの？ 家族や友達が悲しむとは思
わないの？」

また少年が尋ねる。少女もまた頷いた。

「少なくとも、今よりはきつと楽になれる。誰にもいじめられたり、
蔑まれたり疎まれたりしない。それに……こんな狂った世の中で、
生きる意味なんかないよ」

その時、ものすごい爆音が轟いた。見るとジェット機が上空を通
り過ぎてゆく。

「……どうせ死ぬなら、復讐してから死ねばいいのに……」

静かに少年が言った。少女は少年を見つめる。

「いじめたやつらを殺せばいいじゃん。家族と殴り合つてまで話し
合えばいいじゃん。学校に火でもつけばいいじゃん。国会議事堂
に突っ込めばいいじゃん。どうして自分だけ死ぬことを考えるんだ
よー！」

初めて少年の顔が歪んで見えた。少女は首を振った。

「そんなこと……出来るわけない。私が死ねば、それでいいじゃない！」

「……そんなことじゃ、いじめたやつらの思うツボじゃん」

少年はそう言うと、階段に腰を下ろした。少女はそのまま月を見つめる。

「でも……それでも、少なくとも傷は残していけると思う……」

やっとの思いで少女が言った。そして言葉を続ける。

「いじめた子が、私を殺したって思ってくればそれでいい。大人だって、私をどうすることも出来ずに殺したって、そう思えばそれでいい。次の私が出ないような社会になればいい……」

「……ならねえよ」

少女の言葉に、少年が突き返して言う。

「君が死んでも、いじめたやつらは明日には違うやつをいじめるだろう。大人だって結局何も認めたくなくて、何も出来ないんだ。君が死んでも、何もならない」

「じゃあ、どうしろって言うのよ！」

少女が叫んだ。涙が止め処なく溢れてくる。

「もう生きたくない……希望なんて、なんにも見えない……」

そう言った少女に、少年は立ち上がると、もう一度遠い地面を見つめた。

「僕の友達が死んだ時、きちんとした遺書は見つからなくて、原因不明の突発的な自殺として判断された。僕らが、いじめがあったと証言しても、証拠不十分で結局それは反映されなかった。僕も死にたくなった。心が押し潰されそうだった。だから僕も、ここから飛び降りようと思った」

少年の言葉に、少女は少年を見つめた。思わず少年の腕を掴む。それを見て、少年は少女に苦しそうに微笑みかける。

「でも、出来なかった……僕には死ぬなんて勇気、なかったんだ……」

少年の目から、涙が溢れ出た。

「僕は友達を救えなかった。死ぬことも出来なかった。苦しくてたまらないのに……今もこうして、のうのうと生きてる……」

耳鳴りのように風が唸る。その中で、少年の声が聞こえた。

「……僕もいじめの加害者だ。結局、何も出来なかったのだから……だけど、僕は見つけることが出来たんだ」

言葉の続きを求めて、少女は少年を見つめた。少年が、笑った。
「希望……を」

その時、突風が吹き抜けた。風に吹かれて、まるでそこから落ちてしまったかのような感覚に襲われる。

少女は思わず、目を瞑った。

後編

次の瞬間、少女が目を開けると、そこは少女の家だった。少女は夢を見ていたかのように、いつものように自分の部屋のベッドに横になっている。少女には、何が起こったのかわからなかった。

少女は静かに起き上がると、窓の外を見つめた。まだ薄暗い早朝である。

「……」

意を決したように、少女は着替えをすると、まだ眠った町へと飛び出していった。

走りながら向かったのは、小高い丘の上にあるマンション群の団地だ。友達も何人が住んでいるので、幼い頃は、よくこの中庭で遊んでいた。

まだ薄暗い非常階段を、少女は駆け上がってゆく。最上階を過ぎ、屋上へ差しかった階段を、少女は急ぎ足で覗き込んだ。

少年がいるかと思った――。だがそこには、誰もいない。何もない。

静かに笑って、少女は外を見つめた。もうここから飛び降りる気にはなれなかった。薄暗い中で、遠く地面が見える。もう、何も考えられない。

少女はすっかり意気消沈して、ふと空を見上げた。するとそこには綺麗な朝焼けが見える。朝の光に照らされた町が、徐々に目覚めてゆく。

丘の上にそびえる、大きな建物。その最上階から、少女は下を見下ろしていた。徐々に、町に人が溢れる。鳥のさえずりがこだまする。遠くで人の声が聞こえる。動き出した生活音が聞こえる。

「おはよう」

「ごはん出来たよ」

「いってらっしゃい」

「いつてきます」

「気をつけてね」

朝が明けきるのを、少女はただ呆然と眺めていた。

しばらくして、少女は静かに階段を下りていった。今はもう、死ぬ気もなかったが、生きる気力もなかった。ただ何もしたくなかった。何も考えられなかった。

階段を下りると、少女は夢遊病者のように中庭へと出ていく。見上げると、さっきまでいたはずの階段の最上階の部分が見える。

ふと最上階の踊り場に、人影が見えた。少女はハツとして、階段へと近付いた。すると、マンションの清掃員だということがわかる。少女は中庭へと戻っていった。そしてそのまま、コンクリートの歩道を歩き、そばにあったベンチに座る。

「何してるんだろ。私……」

少女が呟く。

ざあっと、木々がざわめく音が聞こえた。その音に振り向くと、少女は何かに気付いて立ち上がった。少しずつ、それに近付いていく。

そこには、少年が持っていた花束と同じ花が、ひっそりと咲いていた。

「この花……」

改めて観察するように、少女がその花を見つめる。しかし、あまり見たことがない花だった。白い花びらが、下を向いて咲いている。その時、突風が少女を襲った。思わず地面に手を着く。耳元で風が鳴った。少女はそっとその花を摘むと、静かにその場を去った。

「どこに行ってたの!」

家に帰るなり、少女は母親に怒鳴られた。母親は涙目になっている。その顔に少女も涙ぐんだ。

「ごめんなさい……」

「もう、心配したじゃないの！」

母親はそう言って、少女を抱きしめる。その温もりに涙を流し、少女はもう一度言った。

「ごめんなさい……」

少女は母親に手を引かれ、家の中へと入っていった。

リビングに行くと、少女は椅子に座らされる。母親は手際よく温かい紅茶を入れて、少女に差し出した。

「無事でよかった……」

独り言のように、母親が静かにそう言った。そんな母親を少女が見上げる。母親は優しい瞳で、少女を見つめている。

「その花、どうしたの？」

少女が握りしめている花を見て、母親が尋ねた。

「ちよつと……綺麗だったから……」

俯いたまま少女が言った。

「スノードロップね。もうすぐ春なのね」

母親の言葉に、少女が顔を上げる。

「スノードロップ……？」

「そうよ。結構この辺りでも、育ててる人多いでしょう」

少女は母親を見つめた。母親は尚も優しい瞳で少女を見つめている。少女は俯き、押し黙った。

「……学校に行きたくないなら、それでいいわよ」

その時、母親がそう言った。

「私たちはね、あなたが生きていてさえくれれば、それでいいのよ」
少女は俯いた。胸を揺さぶるような衝撃があった。しかし何か物足りない気がした。そんな風に思う自分が、不甲斐ないとも思う。母親の言葉は暖かく感じる。幸せだと思った。しかし少女は虚ろな瞳で、摘んできた花をただ見つめていた。心に大きな穴が開いたように、凍りつくような寒さが少女を襲う。

「……お腹空いたでしょう？ 今、作るからね」

母親は妙に気を使った素振りで見ち上がり、台所へと向かっていた。

少女はリビングの椅子に座りながら、ふとテレビをつける。しかしそれを眺めているだけで、何も考えてはいない。思ひ出すことといえは、妙にリアルだった夢。今でも思ひ出すと、胸の鼓動は早くなる。

ふと立ち上がり、少女は握り締めていた白い花・スノードロップを持って、母親のもとへ向かった。

「ああ、花瓶ね」

察して母親が一輪差しの花瓶を差し出した。少女はそれを受け取ると、リビングのテーブルに花を飾った。まるでこの家の象徴のよきに、部屋の真ん中で花は美しく輝いて見える。

「花壇一杯のスノードロップが咲きました」

その時、テレビからそんな声が聞こえ、少女はふとテレビを見つめた。

「下を向いている花びらが特徴的な、この花の名前はスノードロップ。別名、天使の贈り物とも呼ばれていて、春の訪れを告げてくれる花です」

キャスターがそう言って、植物園の花壇を紹介している。

「このスノードロップ。アダムとイヴが楽園を追い出された時、二人が寒くて困っていたところに天使がやってきて、雪を花に変えたという謂れがあるそうなんですよ。この花を見ると、幸せになれるということですので、ぜひ皆さんも見に来てくださいね」

テレビの画面には、花壇一杯のスノードロップが映し出されている。少女はただ、その光景を見つめていた。

そんな中で、キャスターは尚も花の紹介を続けている。

「ちなみに、このスノードロップの花言葉は“希望”。見てみると希望が溢れるような、そんな花に見えますよね。ではスタジオにお返しします」

キャスターの言葉を聞いて、少女はハツとした。希望……確か、

夢の少年が言っていた。希望を見つけたのだと――。

少女は目の前にある一輪の花を見つめた。少女の中に、何かが燃え始めた気がした。

「お母さん……」

突然、少女がそう呼んだ。母親は出来上がったばかりの料理を差し出し、少女の顔を覗き込む。

「なあに？」

「……私、明日から、学校行くね……」

少女の言葉に、母親は驚いた。

「でも、無理しなくても……」

「うつん、行く。無理してでも……行かないといけないような気がするんだ」

そう言った少女を、母親が涙ぐんで抱きしめた。少女の目からも涙が溢れる。

少女は何不自由なく育った。家庭も円満で、寂しい思いなどしたこともない。しかし小学生の頃から、小さいじめが学校で行われていた。からかわれたり仲間外れにされたりが、日常的に行われていた。

少女自身、その対象だった。成績もスポーツも並程度で、もたもたとした性格から次第に同級生から疎まれる存在となっていたのを、少女自身が感じていた。無視されることはしょっちゅうだった。その頃からすでに、少女は不登校気味になっていた。

中学生になつて、それもエスカレートする。言葉の暴力もあった。ただ端から見れば、少女の悩みも小さなことなのかもしれない。それでも少女は、もう耐えられなかった。

「希望……」

少女が呟いた。母親は意味がわからないながらも、少女を抱きしめることをやめない。

母親は、少女から悩みを打ち明けられたことがあった。しかし正論を言うだけで、今は様子を見ようと思っていた。そんな中、少女

が突然姿を消したことで、母親は不安に煽られた。触れれば倒れそうなくらい、母親の姿は小さく見えた。

そんな母親の腕の中で、少女は生きようと決意していた。目を閉じれば、重くなる心を抱えている。一人になれば、不安で心が押し潰されそうになる。けれど少女は、もう一度生きてみようと思った。それは、妙に残った夢のせい――。なにかが少女の心の芯を強く受け止め、支えようとしていた。

次の日。少女は不安げな母親が見送る中で、学校へと向かっていった。

「うわ、来たよ。ずっと来なきやいいのに……」

ひそひそと同級生の声が聞こえる。少女は無意識に耳を塞ごうとする。けれど心の中で、何かが熱く燃え出した気がした。心の奥の炎は、少女が逃げようとするたびに、どんどん熱くなってゆく。

「生きてたんだ」

その声に、少女の中で何かがパチンと音を立て、少女を暖かく包んだ。

「生きてたよ……これからも、生きてくから」

少女が静かにそう言った。揺るぎない声だった。

「はあ？ あんた、何もわかってないわね。死んだほうが楽なのに」
そう言った同級生も、少女に食ってかかる。

「……生きてて楽しいことも、たくさんあるはずだから。それを知らずに、私、死ねない。いじめるなら勝手にやればいい。そんなことしか楽しみがないなら、私が相手してあげる……でも、私は死なないから。生きてくから」

少女はそう言って微笑んだ。その顔は、自信に溢れた強い笑顔だった。

「……好きにすれば？」

対立していた同級生が、そう言って去ってゆく。

少女の中には、小さな白い花が咲いていた。希望という、真っ白

な花が――。

その日から、少女は毎日学校へ行った。やがて、続いていたじめめもなくなっていた。強い少女には用がないといった様子で、対立していた同級生たちはおとなしくしている。少女も次第に、笑顔をとり戻していった。いじめられる前の、少女に戻ったように――。

三年後。少女が少女らしい人生を取り戻したある日、少女はあの丘上のマンション群の団地へと向かっていった。手にはたくさんの、スノードロップの花が抱えられている。

いつか夢の中で、短い人生を終わりにしようと上った階段が、今日は生き生きとした強い表情であった。

最上階の階段から、少女は町を見下ろす。移りゆく時間が心地良かった。

陽に照らされた町、夕日が影を落とす町、月明かりに満ちる町――。少女は時間を忘れて、その風景を見つめていた。

その時、誰かが階段を上ってくる気配を感じた。足音が聞こえる。少女は少し固まるが、そこから動くことが出来ず、その足音の主が来るのを待った。

すると、顔が見えた。中学生くらいだろうか。まだあどけなさが残る、見知らぬ少年だった。

少年は思い詰めた顔をしていながらも、決意に満ちた表情だ。少年はその場に立ち止まったまま、動こうとしない。少女は、じっとその少年を見つめていた。

やがて少女は、持っていた花束を解き、その場から外へと投げ落とした。いつか見た、忘れられぬあの少年が見せた行為が、今の少女にはわかる。希望という名の白い花が、地面へ向かって落ちてゆく。

これは、あの時死んだ自分へのはなむけ。生まれ変わった自分への証。そして二度と、昔の自分と同じような人が現れないように祈

る、願い――。

落ちてゆく花を見つめていたのは、少女だけではない。ここにいる名も知らぬ少年もまた、ただ黙って見ていた。

「……君も死ぬ気なの？」

やがて、少女がそう尋ねた。その問いかけに、少年は静かに頷く。そう、これはいつかの……現実。

「死んだら駄目だよ。君に死ぬ権利なんかない」

続けて言った少女に、少年は口を結び、静かに少女を睨む。

「あるよ」

少年が、初めて口を利いた。

「ないよ」

少女は、きつぱりと否定する。

「ある！」

二人は、睨み合いになった。

「……いじめられてるんだ。もう生きたくない……希望なんて、なんにも見えない……」

やがて少年がそう言った。少年はもう一度、遠い地面を見つめた。その瞳には、落ちた白い花、スノードロップが微かに闇夜に浮かんで見える。

「……私もいじめの加害者よ。結局、何も出来なかったのだから。だけど、私は見つけることが出来たんだ……」

少女の言葉の続きを求めて、少年は少女を見つめた。少女が、笑った。

「希望……を」

その時、突風が吹き抜けた。ざあっと、木々がざわめく音が聞こえた。

後編（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。

この作品は、いじめによる自殺問題が多発している時期に書いた作品です。

今も多く起こりつつある問題……。

大それたことは言えませんが、僅かでも歯止めになることを願って――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2913e/>

永訣の夜に

2010年10月8日13時46分発行